東アジア仏教における多羅信仰の展開

索　南　卓　瑪

The Popularization of Worship of the Goddess Tārā in East Asia

SUONAN Zhuoma

There are many Goddesses consecrate in the pantheon of East Asia Buddhist, and the Goddess Tārā is one of them who originated in India. But after the worship of her spread into East Asia, the ways of the worship have differences because of the cultural differences and the vicissitude of period. In this thesis, I probed into the popularization of worship of Goddess Tārā in the culture of Buddhist of East Asia areas.

キーワード：東アジア仏教、女神信仰、多羅菩薩、展開

はじめに

東アジア諸国において、同じ尊名を有する仏教神々の形象は、かなり異なっている。例えば、仏教女神としての観音菩薩は東アジア地域において広く祀られ、観音信仰も他の神々の信仰より圧倒的である。しかしながら、観音菩薩の発祥地であるインドでは元々男性であり、チベット仏教において今でも男神として祀られている。そのため、チベットにおいてはその化身である多羅菩薩が女性の菩薩として観音菩薩を凌ぐほどの人気を有している。チベット全土の寺院に行くと、観音菩薩の左右に白多羅と緑多羅が脇侍として祀られている組み合わせはよく見かけられ、多羅菩薩はチベット仏教の中では現在でも非常に重要な崇拝対象であり続けている。一方、チベット以外の東アジア地域の寺院において多羅菩薩は見ることが少ない。中国にもこの女神が存在しているが、これはチベット仏教風の多羅菩薩に近い。さらに、日本にも観音菩薩の一尊として三十三観音の一人として祀られているが、一つの女神として単独に祀ることを見かけない。しかしながら、長い仏教歴史の流れの中においてある神の信仰が盛んになったり、衰えたりする現象が不断に起こっている。多羅菩薩も同じ傾向があり、時代と地域によって、かなり複雑な発展と伝播が有している。

多羅信仰については、国内外においてこれまで数多くの研究者が論じているが、その多数はチベット仏教における多羅信仰の現状について考察したものである。たとえば、チベット仏教における多羅信仰

の現状を述べた徳吉卓瑪氏[1] の著書があり、美術史の視点からは諾布旺典[2] 氏と吉布氏の論点がある。また他にも林錦江[3] 氏と李南氏[4] などがいる。海外の研究者として申才恩氏[5] や弥永信美氏[6]、田中公明[7] などの論書がある。これらの先行研究においては現在でも多羅信仰が盛んであるチベットを対象地域にし、チベット仏教における多羅信仰を考察したものが多数である。そのため、本論では、文化交渉の視点から東アジアを対象地域とし、多羅信仰がそれぞれ地域における展開と発展について論じたい。

一　多羅菩薩について

多羅（ターラー）菩薩は Tārā、Tārāni に相当する音写であり、密教経典に登場する女性の菩薩の名で、観世音菩薩の一種の配偶神〈救い母〉の意である。チベット仏教においてはこの女性尊は〔སྒྲོལ་མ〕と呼ばれる。後世、中国では、このチベット名を漢訳した救度仏母或は度母という名称が用いられた。多

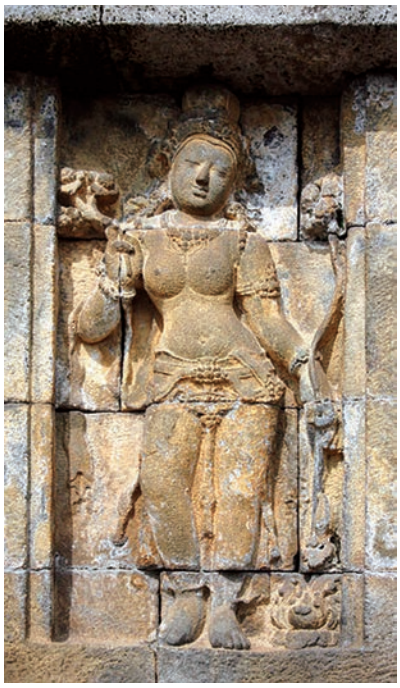

図１　インドネシアジャワ島のボロブドゥール[8]

1）徳吉卓瑪『聖典中的蓮花―度母信仰解析』中國藏學出版社、2007年１月
2）諾布旺典『世界最美唐卡―唐卡中的綠度母』紫禁城出版社、2013年９月
3）前掲林錦江『羅布嘛呢括羅：藏族觀音信仰文化研究』
4）李南「論度母」(『南亞研究』第２期、宗教・哲学版)、2000年、第59～73頁
5）申才恩「ターラー女神＝多羅菩薩の変容―図像学的特徴をもとに」(『インド考古研究』、第31号、『インド考古研究』編集委員会)、2010年７月31日、17～31頁
6）弥永信美『観音変容譚』株式会社法蔵館、2002年７月
7）田中公明『チベットの仏たち』方丈堂出版、2009年10月31日
8）ウィキペディアの多羅菩薩の項より（http://ja.wikipedia.org/wiki/ 多羅菩薩)、2016年11月９日閲覧

羅菩薩は観音菩薩の化身で、密教観音部の仏母である。林錦江[1]によれば、「多羅菩薩」と呼ばれているのは中国の漢文の経典を起源としており、中国密宗の衰退とチベット密教の流行に伴い「多羅菩薩」は新たに「度母」と訳されたが、日本、韓国、ベトナムなどでは今でも「多羅菩薩」と呼ばれている。国や地域によって、さらに細かい呼称が存在するが、本論では「多羅菩薩」に統一する。

1．起源

インドで多羅崇拝がいつ頃から始まったのか、またその起源、発展、流行などについて明確に述べられる文献は管見の限り見当たらないが、李南『論度母』に以下のように述べられている。数多くの研究者が指摘するように、多羅信仰は古代エーゲ海付近で始まったと考えられるため、元来はアジア地域の女神ではない。多羅は古代インドの土着民が盛んに信仰した女神である。その後、段々と仏教、ヒンズー教、ジャイナ教などの女神に発展したと推測される[9)]。一方、多数の佛教経典の中にもその起源について言及されている。特に多羅菩薩の源流について、唐の不空三蔵が訳した漢文経典『仏説大方広曼殊室利経』「観自在菩薩授記品第一」に多羅菩薩の「出生」について次のように記される。

> 爾時觀自在菩薩摩訶薩。頂礼尊足讃如來已。還就本座作如是言。此陀羅尼過去諸佛毘婆尸等。及我世尊釋迦如來。所共宣說隨喜印可。及於未來彌勒世尊。阿僧祇等一切諸佛。亦當宣說。作是語已。入於普光明多羅三昧。以三昧力。從其面輪右目瞳中放大光明。隨光流出現妙女形。住於殊勝妙色三昧。無價雜寶而為嚴身。如融真　金映琉璃寶。所謂成就世出世間密言之要。能息眾生種種苦惱。亦能喜悅一切眾生。遍入諸佛法界自性。由如虛空平等住故。普告眾生作如是言。誰在變苦誰在流溺生死　海中。我令誓度。作是語已。遍遊無量無邊世界。還至佛所右遶三匝。頭面作禮觀自　在菩薩摩訶薩足。合掌恭敬持青蓮華。瞻仰菩薩受教而住。思念如來自在神力。以清　涼光普照眾生。猶如世間清涼月輪能除熱惱。一切幽暝無不照了。復過於是含嬉微笑　。憐愍眾生猶如慈母。以慈悲光普照佛刹。諸天光明皆悉不現[10)]。

上の記載によると、多羅菩薩は観音菩薩が「右の瞳より大光明を放ち、光の流出するに随い妙女の形を現じ、すべての衆生が様々な苦しみを安んじ、平等な心ですべての衆生を救済する」と発願し、「一切の慈母」として現れたものである。まさに大地母神的な大女神として崇められたものとされる。また、チベットの経典『度母本源記』の中には、多羅菩薩の起源について次のような記載もある。多羅菩薩は観音菩薩が「自分がいくら修業しても、衆生は苦しみから逃げられない」と悲しんで流した二粒の涙から生まれた。多羅菩薩は「衆生の済度を助ける」と発願し、菩薩は悲しみを克服したという。この説から見ると、多羅菩薩は観音菩薩の涙が流れ込んだ蓮の花から現れた。観音菩薩の慈悲に感化され、観音菩薩と共に衆生を済度し、人々を生と死の輪廻から解脱させる仏である。よって、多く人は多羅菩薩が観音菩薩の涙から化現したと考えている。

9）李南「論度母」（『南亞研究』第２期、宗教・哲学版）2000年、59～73頁

10）『仏説大方広曼殊室利経』（『大正新脩大藏經』第20巻 No.1101）450頁

多羅菩薩には、古代インドの王女であったとの伝承もある。チベット語の文献『度母源流』の現代中国語訳においては次のように述べる。

在無始之前，在過去佛具足十力的鼓音王如來住世之時，世間的古印度那措沃王國，誕生了一位公主，她是國王的女兒，名叫益西達娃她的形象如同梵天之女那樣美麗動人，她的遍知心或神通如同文殊菩薩那樣智慧，她的身心無比殊勝，對世間的一切充滿愛心、無限慈悲。由於她積善積德，以無價之寶濟施、供養周圍十二由旬的所有眾生與鼓音如來及其眷屬和皈依他的所有僧伽。她如此虔敬地信奉鼓音如來及其教法，在眾僧伽中，她像一座金山，金光閃閃、燦爛奪目、出類拔萃。因此，鼓音如來為她開啟了正法甘露之長河，令她暢飲不盡。

經過長達千萬億年的虔心修習與供養，美麗的益西迭娃公主便發起菩提心，成就福慧二資量。她的善行正行不僅對佛法獲得證悟，而且使她得到殊勝的受生之身。就在這個時候，眾僧人便前來遊說：「由於您的善業和福慧功德，使您的身體已獲得殊勝的受生之身，希望您的身體變為男兒之身。如果您能以此做利法事業發願，就能如願以償。」然而，美麗的公主益西迭娃卻拒絕了眾比丘的誠意，堅定不移地立誓弘願：「在世間為了獲得受生之身，願發菩提心者雖然有很多，但是，以女性之身為眾有情做利法事業者卻絕無，我願以女性溫柔善良的本性和如同金剛般的誓言，為眾生有情做利樂之事，救護芸芸眾生，流轉未盡、輪迴不空之際，誓願以女身度化眾生。」從此，美麗的公主益西達娃安住王宮，在那裡修持三摩地。

又經過數千萬億年的艱苦修煉，益西達娃公主終成正果。她不僅對無生法獲得安忍，而且證得度脫所有眾生的三摩地。由於三摩地的無窮威力，公主每天上午使千萬億眾生有情從惡趣道中度脫，每天下午使千萬億眾生有情安住於善趣道，從而「度母」之名遍滿世間。具足十力的鼓音王如來便預言：「無論在有學或無學之時，你的『度母』之名將永遠不改變。」

就這樣又到了尊勝佛住世的時候，以「度母」尊稱的公主又在世間怙主不空成就佛座前立下第二個弘誓：「我願救度和呵護十方所有眾生，使他們從一切厄難中獲得解脫。」於是，她以壞滅惡魔之三摩地威力，白天攝伏世間的千萬億惡魔，夜晚亦復如是，能降伏千億魔軍。使無數眾生有情從恐怖中得到救拔。故而，又以「救度速勇母」著稱於世。到了無礙圓滿劫的時候，有一位禁行守持清淨戒律的比丘，名叫沃吉囊瓦，被一位正覺仙人用修持幾劫的福慧二資糧和明咒之甘露授受十方如來大悲光明之灌頂，使這位究竟十地的沙門佛子沃吉囊瓦，成為擁有三界之法的觀世音菩薩。復又以能成為如來五佛等諸佛、菩薩智慧本性的光明為觀世音菩薩授受灌頂，於是，先後兩次授受的光明，從手持蓮花的觀世音菩薩之心際中化現出兩個幻變之身，即度母女神和現世音菩薩，並以佛父、佛母之化身化現。從此，度母女神與觀世音菩薩結下不解之緣，且以殊勝的幻化之身，示現種種法相，救度無數眾生有情，從一切苦難中獲得解脫。到了大賢劫阿森噶之時，十方所有善逝佛為度母授受灌頂，故成為一切佛衍生之母[11)]。

以上がチベット語の文献による多羅菩薩の伝説である。ここでは、「過去仏」である鼓音王如来が在り

11）甘肅省藏學研究所『香敦・丹巴嘉措大師文集』「度母源流・玉葉世界」甘肅民族出版社、2004年11月

し時、古インドの那措沃【彩光】王国では一人の王女が誕生した。王女の名前はイエシダウァ（益西達娃）【チベット語、慧月】といった。彼女は天女のごとき美しさ、文殊菩薩のごとき賢さ、多くの美徳を持ち、世の中のすべての者に慈悲を注ぐ女性であった。彼女は善行による徳を積み、敬虔に鼓音王如来の教えを信奉した。彼女は数多くの僧侶と共にあっても、その智慧は宝物のように輝き優れていたため鼓音王如来は正法甘露の教えを授けた。千万億年の修業により、イエシダウァは特別な慈悲の境地を得た。ところで、僧侶たちは彼女に、修業のため男性の身に変わることを説得したが、王女イエシダウァはそれを断った。彼女は「世の中では多く人が菩提心を持つようになったが、女性の身として衆生を救済する者はまだ存在しない。」そのため彼女は女性の善良と優しい本質とを持ったまま、金剛のごとき固い誓いによる利他の行いで衆生を済度する誓いを立てた。これにより「度母」と称されるようになる。また、千万億万の修業を通じて、イエシダウァはようやく成果を得る。その後、彼女はまた十方の衆生を済度し、苦しみから抜度することを発願し、昼夜を問わず何千億の悪魔と非人を屈服させたため「救度速勇母」とも呼ばれる。

この伝承により、多羅菩薩の起源と発展の過程がある程度判明する。多羅菩薩は始めに美しい王女の身分から菩薩へ、そして、時代によって徐々に変化していき、菩薩、女神、化身と諸仏の母になっていったことが分かる。つまり仏教における多羅の性格は、「菩提心を生じ、仏果を成就し、最後に衆生を救済する」というものである。

以上の説の中で、いずれの説にしても、多羅菩薩は心の中に慈悲と平等観念を満ち、美しさと利口を具える一体的な女神であるため「度母」または「救度の母」と称された。仏教における多羅信仰は、古代エーゲ海からインドへ伝わり、そこで苦しみを取り除き、衆生を救済する女神となったことが分かる。

2．インドにおける流行

当時のインドでの多羅信仰の状況については林錦江『羅布嘛呢括羅：藏族觀音信仰文化研究』に以下のように言及している。多羅信仰がインドでの流行については詳しい記載がないが、林錦江『羅布嘛呢括羅：藏族觀音信仰文化研究』では、

> 多羅信仰は古代インドで非常に流行していた。ナーランダ大学の遺跡から出土した仏像の中には、多羅菩薩の塑像も多かった。現在のブッダガヤではまた当時彫刻された多羅菩薩の像が残されている[12)]。

と述べられている。さらに、多羅信仰について、古代インドでの流行の時期や状況を明確に記載している文献に唐の僧侶玄奘の著作『大唐西域記』がある。玄奘は633-645年にインドに遊学し、帰国後『大唐西域記』を著した。この中で多羅菩薩とその信仰状況について二箇所言及されている。一箇所はマガダ国、もう一箇所はナーランダ寺付近である。『大唐西域記』の第八巻に云う。

12）前掲林錦江『羅布嘛呢括羅：藏族觀音信仰文化研究』

至輥羅擇迦伽藍。庭宇四院，觀閣三層，崇台累但，重門洞啟，頻毗娑羅王末孫 之所建也。旌召高才，廣延俊德。異域學人，遠方髦彥，同類相趨，盾隨庚止。僧徒千數，並學大乘。中門當塗有三精舍，上置輪相，鈴鐸虛懸；下建層基，軒檻周列。戶牖棟樑，蠕垣階陛，金銅隱起，廁聞莊嚴。中精舍佛立像高三丈，左多羅菩薩像，右觀自在菩薩像。凡斯三像，輸石鑄成，威神肅然，冥鑒遠矣[13]。

玄奘の文章から整った環境の寺院の中で国内外の仏教僧が集まり、多羅菩薩、釈迦、観音菩薩三尊の威厳のある像を供養している情景が述べられる。当時、多羅菩薩はインド仏教圏において地位が高く影響力があったことがうかがい知れる。
また『大唐西域記』第九巻に云う。

滿胄王銅佛像北二三裡，磚精寺舍中有多羅菩薩像，其量既高，其靈什察。每歲元日，盛興供餐。鄰境國王、大臣、豪族，齎妙香花，持寶豬蓋，金石遞奏，絲竹相和，七日之中，建斯法會[14]。

ここでは、七世紀にインドのインダス川流域の人々が多羅菩薩を祭る場面を紹介している。この場面から当時の多羅菩薩の流行とその地位が分かる。

つまり、玄奘はインドに遊学したのが７世紀のことであり、この時代インドにおける仏教は常に後期密教の時代に入っている。呂建福氏[15] によると密教は陀羅尼密教、持明密教、真言密教、瑜珈密教と無上瑜珈密教五つに分け、後の二つは金剛密教とも呼ばれるという。

つまり、玄奘はインドに遊学したのが７世紀のことであり、この時代インドにおける仏教は常に後期密教の時代に入っている。そのため、多羅信仰は後期インド仏教においては重要な仏教女神の一尊として崇拝されていることが推測できる。

二　東アジアにおける展開

多羅菩薩は現在の東アジア諸国においてはほとんど知られてない。多羅信仰も盛んになったり、衰えたりする現象が不断に起こっているが、現在の東アジアにおいては多羅信仰の高揚を受けているのがチベット仏教であると言える。この点は、多羅信仰をあまり重視しない中国仏教と、単独で信仰されない日本の多羅尊観音とは大きく異なる。そのため、次に東アジア諸国における多羅信仰の展開と発展、信仰状態などについて詳しく論じてみたい。

1.1　チベット仏教における多羅信仰について

多羅信仰はチベット仏教の中では現在でも非常に重要な崇拝対象であり続けている。この点は、多羅

13)「大唐西域記校注」中華書局、1985年、650頁
14)『大唐西域記校注』中華書局、1985年、761頁
15) 呂建福『中國密教史』中国社会科学出版社、2011年、３頁

信仰をあまり重視しない中国仏教と、単独で信仰されない日本の多羅尊観音とは大きく異なる。『チベット王統記』[16] によると、多羅信仰は七世紀にネパールから伝わり、1042年にアティーシャ尊者がチベットで布教したことにより、チベット全地域に広がったとされる。この記載から多羅信仰は仏教全般と同じく、インド、ネパールなどで盛んに信仰されていたことが推察される。また、東アジア各地域において現在でも多羅菩薩を盛に祭られているのはチベット仏教系であると言えよう。それはチベット地域だけではなく、全世界のチベット仏教系の地域において、多羅信仰は非常に重要な位置にある女神の一尊である事は言うまでもない。その多羅菩薩はいつチベットに伝来したのかについてはチベットの典籍『柱間史』に次のような記載がある。

> 公主騎著大象，手秉栴檀手度母像，隨行携帶着不動金剛像，慈氏法輪像和『白蓮花經』等各種佛經以及五部陀羅尼，還有眾多的工匠，僕從和七頭大象滿載的財貨珍寶[17]。

つまり、以上のことからチベット最初の多羅菩薩像はネパールの王女チツンにより、始めてチベットへ伝来したという。彼女はチベットの歴史において最初に多羅菩薩像をもたらしただけではなく、ネパール或はインドの仏教芸術も同時に伝えた。さらに、チベットのもう一つの典籍『チベット王統記』[18] によれば、チベットの上には巨大な魔物が寝そべっていたが、ソンツェン・ガンポは魔物の心臓に当たるラサにトゥルナン寺とラモチェ寺を建立し、さらに、王と妃で魔物の両手、両足、両肩などに当たる地域に寺院を建立して、この魔物を鎮撫し、これらの寺院の中に多羅神殿も多数あったとある。以上の記載から吐蕃時代から多羅菩薩はチベットの人々に崇拝されていたことは明らかである。しかしながら、仏教が初めてチベットへ伝来後、その発展は順調ではなかった。ソンツェン・ガンポ王の吐蕃王国を成立したごろから、仏教はチベットの原始宗教ボン教と長い間戦い続けた。9世紀半ばに廃仏政策をとるランダルマ王が現れ、その後、仏教は王室の保護を失い、受難の時代を迎える。この時期までに伝えられた密教は前伝仏教（ガダル）と言われ、アティーシャの入蔵を契機として復興した仏教は後期密教（チダル）と呼ばれる。この受難の時代は11世紀まで長い間続いた。しかし、10世紀ごろより、チベットからインドにわたり修業や勉強を行う者が現れ、逆にイスラーム教化が進むインドを忌避した学僧や行者たちがチベットに移り住んできたことにより、チベット仏教界は徐々に復興の途についた。11世紀になると、西チベット（ガリ地方）の王イェシェーウが、仏教の復興を目指して優秀な若者をインドのカシミールへ留学させ、また、インド後期密教の総本山ヴィクラマシーラ僧院の大学匠アティーシャをチベットへ招請した。多羅信仰がチベット全地域で盛んとなったのは11世紀にチベットへ布教に来たアティーシャ尊者の力によることが大きいといえる。なぜなら、彼自身も多羅菩薩の忠実な信者だったからである。

16）ソナンジャンツウン著、劉立千訳『チベット王統記』民族出版社、2002年9月

17）『柱間史』アティーシャ著、盧亜軍訳、1987年

18）『チベット王統記』ソナンジャンツウン著、劉立千訳、民族出版社、2002年9月

1.2　アティーシャ尊者による伝播

アティーシャのチベットにおける布教活動は、一時衰退したチベット仏教の復興と多羅信仰のチベット全地域への流行に大きな役割を果たしたと言えよう。後伝仏教における多羅菩薩の流行に関して、インド後期密教の総本山ヴィクラマシーラ僧院の大学匠アティーシャは無視できない存在である。アティーシャは九八二年の生まれとされる。彼はベンガル地方の王家に生まれ、各地に師を求め種々の仏教を学んだ。二十九歳の時に、大衆部の持律師シーララクシタから具足戒を受け、ディーパンカラ・シュリージュニャーナと称した。大小乗の論典を学び、ラトナーカラ・シャーンティにも学べた。その後、ヴィクラマシーラ僧院の座主を務めていた時に、ガリ地方の王チャンチュプ・ウー招きを請けた[19]。德吉卓瑪の『聖典中的蓮花一度母信仰解析』[20] によると、アティーシャは入蔵後、強力に多羅信仰を推進し、多羅菩薩に関する経典を数多く編纂し、その努力によって、11世紀後半にはチベットでも幅広く流行した。14世紀にチベットの有名な著作『紅書』[21] が出版された時、多羅菩薩はチベット民族の先祖母として記載された。後期チベット密教伝来期に発展した宗派、ニンマ派、サキャ派、カギュー派、ゲルク派はアティーシャの流れを込んでいると主張しており、彼の影響力が分かる。また、『青冊史（テプテルゴンポ）』によれば、アティーシャは1042年の西チベット到着以来、1054年にニェタンで没するまでの間、チベットで仏典翻訳や弟子の育成を始めとする宗教活動を続けたとされる[22]。つまり、後伝仏教期は、チベット王チャンチュプウーがヴィクラマシーラ僧院の座主アティーシャをチベットに招待したことによって始まる。彼は1042年にグゲに到着し、王の要請に答えて、今でもチベットで有名な経典の一つである『菩提道灯論』を著した。これについて、田中公明の『図説チベット密教』に次のように述べられる。

> 彼は王の要請に答えて、『菩提道灯論』を著した。同書は「ラムリム」（菩提道）の体系によって、大小乗、顕密の全仏教を、僅か三頁の表裏に集約したもので、復興された出家教団と、煩悩を是認する後期密教の両立に悩んでいたチベット仏教に、一つの進路を示すことになった[23]。

アティーシャはインドに帰還しないまま、七十三歳となった1054年、中央チベットのニェタンの地で遷化した。弟子ドムトゥンは、アティーシャの死後間もない1056年、ラサの北方にラデン寺を建立した。後日、そこはアティーシャの教えに従う人々が集う大僧院へと発展した。また、「ガダム派」を作り、アティーシャを開祖として尊崇した。アティーシャはパトマサンバヴァ（蓮華生大師、8世紀後半頃）、ツォンカバ大師（1359-1419）と合わせチベット仏教で最も影響が強い三人に数えられる。

アティーシャは入蔵後、多羅信仰を強く提唱し、多羅菩薩に関する経典も数多く編纂した。德吉卓瑪の『聖典中的蓮花一度母信仰解析』に次のように述べる。

19）『新アジア仏教史09　チベット』「須弥山の仏教世界」佼成出版社、146頁

20）德吉卓瑪『聖典中的蓮花一度母信仰解析』中國藏學出版社、2007年1月

21）ツゥバ・グンガドゥチェ著『紅書』、1363年

22）前掲『新アジア仏教史09　チベット』「須弥山の仏教世界」148頁

23）前掲田中公明『図説チベット密教』43頁

藏傳佛教“後弘期”（978）肇始後，著名高僧阿底峽尊者（982-1054）對度母的熱烈崇拜，感染著藏地的廣大信眾，以他為始祖的噶當派將度母奉為該宗派的四大神靈之一，促使度母信仰在廣大藏區盛行。大量的度母經典在這一時期譯成藏文，廣泛流布，度母崇拜在藏族社會達到登峰造極。特別是藏地著名大譯師，諸如年・達瑪劄、巴日・仁欽劄、麥覺・洛智劄巴、奴・強巴貝、丹貝尼協、嘉・森格宗哲、秋曲傑貝、勳奴沃、慈成森格、勳奴西饒、嘉央格貝多傑、西饒堅贊、瑪班曲貝等，從印度、喀什米爾等地將不同師承的有關度母的禮贊、念誦、供養、灌頂、壇城等修持儀軌和密法訣竅譯成的藏文，以千流百匯的態勢傳入藏族地區，大大擴充了度母崇拜的內容，而且其形式更加紛繁多樣。其中，龍樹菩薩的《度母修持法》，阿底峽尊者的《白度母修持法》、尼瑪貝瓦大成就者的《二十一度母修持法》等對藏傳佛教產生了廣泛的影響。現已收錄到藏文大藏經《甘珠爾》、《丹珠爾》的相關經籍近七十部。藏傳佛教各宗派高僧大德依據這些教法經典並結合各自的修持體驗和需求所著的各種度母修持法和禮贊等，則數不勝數，且形成各自不同的風格特點和流派傳承，直至今日，相沿不斷。這些教法經典不僅是藏傳佛教的重要組成部分，而且已成為人們認識、體驗和把握度母的一種途徑和方法[24]。

アティーシャの尽力により11世紀後半になると多羅信仰は広く流行する。14世紀にチベットで出版された有名な書物である『紅史』[25] には、多羅菩薩はチベット民族の先祖母として記載されている。チベット仏教後伝期に発展した宗派、ニンマ派、サキャ派、カギュー派、ゲルク派はそれぞれ本宗派が信仰する本尊を有す。それはアティーシャの直系の後継者だと考えられる。彼らは敬虔に多羅菩薩を信仰し、本宗派の護神的存在であり、千年以上にわたりチベット人の日常的生産活動や生活に影響を与えている。また、畢瑞は『扎塘寺壁画中緑度母図像探源』の結論部分で次のように述べる。

11世纪阿底峡在卫藏的佛教传播活动，直接导致了绿度母信仰在卫藏地区的蓬勃发展，这为扎塘寺波罗风格绿度母的表现提供了外在条件。通过与热振绿度母图像比较，可知扎塘寺绿度母波罗风格源于阿底峡由印度带来的波罗风格唐卡。（略）综上所述，扎塘寺波罗风格绿度母的表现是基于阿底峡所传度母教法的影响，其图像是以热振绿度母中的绿度母和独髻母为范本进行创作的。出于壁画构图原因，在设置图像时只选取了局部。扎塘寺波罗风格绿度母反映出印度高僧阿底峡在卫藏的影响，他不仅带来了正统佛教，同时也带来了东印度波罗王朝的艺术风格，对11世纪卫藏佛教发展和艺术风格的奠定起了至关重要的作用[26]。

以上のことから、チベットにおけるアティーシャの布教活動は、一時衰退したチベット仏教の復興と多羅信仰のチベット全地域への流布に大きな役割を果たしたと言えよう。多羅信仰がチベットで盛んに

24）前掲德吉卓瑪『聖典中的蓮花一度母信仰解析』

25）『紅史』ツォバ・グンガドゥチェ著、1363年、本書はモンゴルによる世界の「世界化」の影響を受け、チベット人自身が自ら（チベット）と世界（インド、シナ）との関係を、仏教を中心に据え、解釈したものである。

26）畢瑞「扎塘寺壁画中绿度母图像探源」『西藏研究』第４期、2008年８月

なった理由については、以下三つの面がある。まず、多羅菩薩は美しく、慈悲のイメージで、密教万神殿の数多く忿怒尊より親和力があった。第二は、多羅菩薩はすべての衆生が様々な苦しみから救い、平等な心ですべての衆生を救済するため、人々の精神的な拠り所となった。第三は、多羅信仰はチベットで「民衆の神様」と呼ばれ、複雑な儀軌を必要とせず、人々は彼女の名を念ずるだけで霊験するため、人々に受け入れられやすかった。

1.3　多羅菩薩の図像

後期チベット密教において多種多様な女性仏（仏母）や女性菩薩が崇拝されるようになった。多羅菩薩も多羅信仰の隆盛に従い、チベットでは様々な種類の多羅菩薩像が製作された。多羅菩薩のモデルとしては「原型モデル」と「化身モデル」に分けられる。原型モデルはすべての多羅菩薩の母体となった緑多羅と単独に祭る白多羅である。化身モデルとは多羅菩薩は独立した個体だけではなく、独立した個体から違名と異数の群体が派生し、異なる空間で各々変化し、静、穏、美、または、怒、恐怖、醜などの面相で表現され、異なる色と面相、姿を形成する。何万尊もの化身に顕在し、苦しみにある人々を救済する。『仏説聖多羅菩薩経』に以下のように記述される。

> 是多羅菩薩，本從阿字生，或生諸行相，不生亦不滅，是相如虚空，虚空性生故，隨應現本相，相一多無疑，色相現無邊，善寂体純一，常現幻化相，密言真實語[27]。

また、チベット仏教の塑像儀軌『造像量度經』に云う。

> 多羅菩薩像，凡佛母天女相者除非手印等差別類，其餘以此式可為通用也[28]。

これらから、多羅菩薩には多数の姿があり、緑、白、紅、黄、青、黒などの色と、１～12の面貌、２～36の眼、２～24の手を持つ。遊戯座に座し、右手に与願印、左手に蓮花を有する姿が多羅菩薩の基本である。その中に多羅菩薩の原型或は個体としてチベットで散見するものは「緑多羅菩薩」と「白多羅菩薩」である。化身モデル或は群体モデルとしては「多羅（ターラー）五百尊」、「多羅（ターラー）百十八」、多羅（ターラー）二十一尊」、十六難救済多羅、八難救済多羅などが存在する。

後世、チベットでは様々な種類の多羅菩薩が生まれたが、個体で崇拝される多羅菩薩の中で緑多羅菩薩と白多羅菩薩が有名であり、インド、ネパール、チベットで最もよく知られた尊格である。多羅菩薩は白、緑、黄、赤、青の５種類ある。これは密教五仏の影響を受けたものである。中でも白多羅と緑多羅は庶民に一番尊敬されている多羅である。田中公明の『チベットの仏たち』の中に次のように述べている。

27）『仏説聖多羅菩薩経』（『大正新脩大藏經』第20巻 No.1104）471頁

28）大蔵経、『仏説造像量度経』北京、中華書局出版社、1994

このうち白色ターラー菩薩は、延命・長寿・無病息災など、主として息災法関係に効験ありと言われています。いっぽう緑色ターラー菩薩は、商売繁盛・利殖・蓄財など、増益法関係に効験ありとされています。白色ターラーと緑色ターラーは、観音の両脇侍として、左右に侍することがあります。また吐蕃王国の基礎を築いたソンツェン・ガンポ王は観音の化身とされますが、その妃である文成公主とティツゥン公主は、それぞれ白ターラーと緑ターラーの化身と考えられるようになりました[29]。

つまり、観音菩薩の右目の涙から生まれた白多羅菩薩、長寿の女神様と左目から流れ出た涙から生まれた緑多羅菩薩、両手に蓮を持ち願望成就させるものが全ての多羅菩薩の中でも最も人気のある形である。

①緑多羅菩薩

緑多羅菩薩は観音菩薩の左目から流れ出た涙から生まれた。チベット語で（ཡང་དཀར།）と呼ばれ、聖救多羅とも呼ばれる。慈悲と絶美の象徴。「世間三殊勝の神」として崇拝されている。両手に蓮を持ち、願望を成就させる。緑多羅菩薩は福・寿・財を増し、災難と悩みを解消し、生死輪回の苦しみを止める力を持つ。各教派では共通して尊重される。また、緑多羅はすべての多羅菩薩の主尊［本体］としてチベットでは、人々の一般生活において信仰される。全身は緑色であるため「緑多羅（緑ターラー）」と呼ばれるようになった。この点については徳吉卓瑪の『聖典中的蓮花―度母信仰解析』の中に以下のように述べられる。

図２　緑多羅

29）前掲田中公明『チベットの仏たち』第160頁

紫檀林中的度母（ལྷང་ལྷང་ནགས་ཀྱི་སྒྲོལ་མ།），是所有度母的本源，是人們常說的綠度母。紫檀林，又稱担木林，是度母駐錫地的一種地貌特徵。傳說，綠度母居住在普陀洛伽山腳下的紫檀林中，這兒是她的道場——玉葉世界（གཡུ་མོ་བཀོད་པའི་ཞིང་ཁམས།），所以，也稱她為「紫檀林中的的度母」或「担木林的度母」。她有各種不同的化身，諸如救八難度母，二十一度母等等，並以不同的形象形貌示現，滿足人們的心理需求。然而，不論在印度河流域和雪域高原有多少個度母女神或菩薩，但最根本的是紫檀林中的綠度母，她是所有度母的母體和原型，也是所有度母之功德的總摂聚集[30]。

とある。コンボジャプの『造像量度経續補』に云う。

佛母（明妃）：面相為十六歲童女相，臉形如卵或芝麻，目為微睜狀，形如蓮花瓣。乳房堅實不傾。頭髮攢系一半，向後傾斜，餘髮下垂，發梢過肘。手腕，腳腕，指尖，腰，都比其他像稍細，胯則寬厚。衣服庄嚴與菩薩像相同，即衣為雲肩飄帶，下裳為雜色長短重群。庄嚴寶石：寶冠，即五佛冠，耳環，項圈，大瓔珞，手鐲，腳鐲，珍珠絡腋，寶帶[31]。

つまり、緑多羅菩薩は十六歳の少女の様相で、緑の肌を持ち、純潔無垢、一面二臂、慈悲深く美しく、頭髪は半分を纏め頭上に結び、半分はそのまま肩に流し、五仏宝冠を戴く。右足を伸ばし、左足は胡座をかき、蓮花日月輪に座す。右手は右膝に置き、両手の間に青い蓮花を持ち、全身はエメラルドのような緑である。以上のことからは緑多羅の塑像はある特定の基準により作られ、尊格の姿、全身の色、手印と装飾なども独自の意義を内包している。この点について德吉卓瑪は次にように述べている。

綠度母的身色、手印和各種飾物，都有其象徵意義。身呈綠色，代表了諸佛之事業，其蘊意與五佛中的不空成就佛一樣，成就一切事業，故具有綠色身相。綠色象徵著生命和希望，它賦予人類一種生生不息的創造力量，它將一切陰鬱和暗淡的色綵排斥在外，生機盎然，欣欣向榮。右手結施與願印，即食指與拇指相抵，有施予、令人如意如願、賜護及普度的意思；左手作結寶印，豎起的食指、中指及小指，分別表義佛、法、僧三寶。度母左右手均持一枝有果實、花蕾及盛開的花朵之「烏巴拉」青蓮花，其中，果實代表以迦葉佛為首之過去諸佛，盛開之花朵，代表現在的釋迦牟尼佛，花蕾代表以彌勒為首之未來諸佛。就是說，度母手持的果實、花朵及花蕾，代表了過去、現在、未來三世一切佛，象徵度母為三世諸佛之化現；她的右腳前伸，左腿彎屈，表示悲智雙運，擁有無限的慈悲心和智慧，攝伏三界及惡魔，能隨時救度眾生有情[32]。

以上の記述から、多羅菩薩の塑像は特定の基準により作成され、尊格の姿、全身の色、手印と装飾なども独特な意義を内包することが分かる。また、仏教では、文殊菩薩はすべての仏の知恵の纏まり、観

30）前掲德吉卓瑪『聖典中的蓮花一度母信仰解析』第10頁

31）コンボジャプ『佛教造像量度經與儀軌』北京宗教文化出版社、1995年、40頁

32）德吉卓瑪「論度母的起源與文化模式」『西藏研究』第４期、2006年11月、24～29頁

音菩薩はすべての仏の慈悲の纏まり、そして、多羅菩薩はすべての仏の事業の纏まりである。『仏説大方広曼殊室利経』「観自在菩薩授記品第一」に云う。

> 演説其功德，猶尚不能盡，持此多羅者，應受人天供，多羅大悲者，一切之慈母，天人及藥叉，無一非子者，故號世間母，及與出世間，觀音大勢至，金剛與善才，文殊須菩薩，慈氏與香象，眼光無盡意，離垢虛空藏，妙眼及大慧，維摩登菩薩，皆是多羅子，亦是波若母，三世諸如來，一切摩訶薩，無一非子者，皆稱是我母，慈育諸有情，安載如大地[33]。

チベット仏教において多羅菩薩はすべての諸仏の母の存在である。ここでの「母」は第一章でも述べたように人を指すものではなく、仏或は菩薩の智慧を示している。世の中では「母」の功德が一番大きいため、チベット仏教においては「母」が智慧を表す。以上のことについては德吉卓瑪の『論度母的起源與文化模式』の中に次のように解説している。

> 就勝義而言，度母於無量劫前即已成佛，法身即是三世一切諸佛菩薩之本「般若佛母」，報身為「金剛亥母」(另一說為五方佛母)，化身乃三世一切諸佛菩薩事業之化現。正因為度母具有這樣的殊勝特性，所以她以一個神聖存在的永恆實體，使廣大信仰者獲得一種信念[34]。

また、『度母本源記』によると、緑多羅を供養すると八つの恐れを抜け出し、八つの災難を解脱する。そのため「救八難多羅」とも呼ばれる。さらに、緑多羅の法を修めれば、災いを逃れ、罪業が消滅し、財宝を得て、長寿になれると信じられる。緑多羅の十字の真言（ཨོཾ་ཏཱ་རེ་ཏུ་རེ་ཛ་ཧཱ།）も多羅二十一尊根本呪で、チベット仏教の普及した地域で広く耳にすることができる。

さて、ここまでは観音菩薩の左目から流れ出た涙から生まれた緑多羅について考察してみた。緑多羅はすべての多羅菩薩の主尊であり、全身が緑色であるため、緑多羅と呼ばれるようになった。また、その塑像はある特定の基準に従い作成され、尊格の姿、全身の色、手印と装飾なども独特の意義を内包し、商売繁盛・利殖・蓄財など、増財関係に効験があるとされていることが分かった。次には観音菩薩の右の涙から生まれた白多羅菩薩について検討する。

②白多羅菩薩

白多羅は多羅菩薩のもう一つ尊格で、チベット語で（སྒྲོལ་དཀར།）と呼ばれる。チベット仏教において普遍的に崇拝されている女神の一つで、温和で善良、聡明で人助けに熱心、救度母とも言われる。白ターラーは美しい女神で観音の救済にもれた人々も残さず救う万能の救済神である。無量寿仏、仏頂尊勝母とともに長寿三尊の一つに数えられ、長寿の女神で、長寿多羅とも呼ばれる。チベットではネパールの王女チツンは白多羅菩薩の化身であると考えられている。前に述べたように観音菩薩が「自分がいくら修

33）『仏説大方広曼殊室利経』（『大正新脩大藏經』第20巻 No.1101）451頁

34）前掲德吉卓瑪「論度母的起源與文化模式」『西藏研究』

図３　白多羅

業しても、衆生は苦しみから逃げられない」と悲しみ流した二粒の涙から生まれた。その左目から流れ出た涙から生まれた緑多羅菩薩と右の涙から生まれたのが白多羅菩薩である。白多羅菩薩の姿容は緑多羅菩薩と大きな差異はないが、両手の掌と両足裏に目があり、額に一目あることから、七目神と称する。弥永信美は白多羅のこの点について次のように述べている。

> チベットおよびネパールの「白のターラー」の図像には、さらにもう一つ驚くべき特徴を見ることができる。図像文献には指示されていないにもかかわらず、この白のターラーは多くの場合、顔の両眼の他に額に縦の一眼、そして両手の掌に二眼、さらに結跏趺坐して上を向いた両足の足裏に二眼、という「七眼」を備えているのである。―これが先の「足目仙人」や四肢に性器がついているという女鬼 Dirghajihvi を想起させることは言うまでもないだろう[35]。

また、諾布旺典によると、

> 白度母的七目，三只生在面部，其中額頭眉心處的一目，因為佔據着中脉開口處的位置，所以象徴著觀盡一切虚空，及十方無量佛土。面上其餘耳目，代表地上輪，可照阿修羅道，天道。手心耳目，代表地面輪，照人道，畜生道。足心耳目，代表地下輪，可照地獄道，餓鬼道。手足心的四目，也被稱為四解脱門之目，具有引領眾有情擺脱苦難，到達解脱之彼岸的寓意。以上六目，可以遍観宇宙中的一切事物，從而使眾生悉得解脱[36]。

35）前掲弥永信美『観音変容譚』第453頁

36）前掲諾布旺典『世界最美唐卡―唐卡中的綠度母』第134頁

という説もある。以上のことからは白多羅の七つの目にも特定の基準により作られたことが分かる。また、尊格の姿、全身の色、手印と装飾などにも独特な意義を内包していることが推測される。火克淑はこの点について以下のように述べる。

> 白度母全身寶珠瓔珞，細腰豐乳如16歲妙齡少女，雙跏趺坐於蓮花月輪上。右手持花置膝施接引印，左手當胸，以三寶印捻烏巴拉花。花分三朵，一朵含苞待放，一朵半開，三朵表示三寶。修持白度母，能增長壽命及福慧，斷輪迴之根，免除一切魔掌，瘟疫，病苦，凡有所求無不如願[37]。

また、林錦江は次のように記す。

> 白度母如月光般清淨的無垢光明照耀世間，縱然百千萬星宿俱時為聚集，殊勝威光仍然遠超于彼，受到各方眾生的禮敬。白度母的功德誓願和心咒，主要為熄滅眾生的病苦，消除因冤業，痴業，魔障引起的傳染病，瘟疫，各種病症，亦可對治蠱毒惡咒引起的疾病，幫修行者去除逆緣，增長壽量，解脫生死輪迴[38]。

以上のことからは白多羅菩薩の塑像も緑多羅菩薩と同様に特定の基準により作成され、尊格の姿、全身の色、手印と装飾なども独自の意義を内包している。白多羅は花冠を戴き、両耳に大きなイヤリングをつけ、蓮花座にあぐらをかいて座り、左手に蓮の花を持ち、右手の掌を外に向け、人間の願いを受けとめる菩薩である。白多羅法は修練により、長命と智慧を得て、輪廻の輪を脱した。そのため、疫病と魔障を除き、病気平癒、延命長寿など息災法関係に効験があると言われている。

２．中国における信仰について

現在の中国寺院において、多羅菩薩を祀られていることはほとんど見られない。しかし、多羅信仰は完全に中国に伝わってこなかったわけではなく、実は唐時代の漢訳経典の中に多羅菩薩に関する記載がある。それは前にも述べたように後の元、明、清時代は中国の帝室はチベット仏教を保護し、その影響によって「度母」或は「救度仏母」と訳されたため、チベット密教の衰退によってあまり知られてない尊格となったのである。漢訳経典における多羅菩薩の名称は以下の経典に見られる。

１）大毘盧遮那成佛神變加持經（略：大日經）七卷，唐代善無畏及一行譯。
２）佛說大放光曼室利經一卷，唐代不空譯。
３）金剛頂經多羅菩薩念誦法一卷，唐代不空譯。
４）佛說聖多羅菩薩經一卷，宋代法賢譯。
５）聖多羅菩薩一百八名陀螺尼經一卷，宋代法天譯。

37）前掲火克淑「藏傳佛教度母崇拜源流探析」（『絲綢之路』第８期、絲綢之路 宗教研究）
38）前掲林錦江『羅布嘛呢括羅：藏族觀音信仰文化研究』第143頁

図４　広仁寺

６）讃揚聖德多羅菩薩一百八名經一卷，宋代天息譯。

７）聖多羅菩薩梵讀一卷，宋代施護譯。

以上に経典から多羅信仰は唐時代に既に中国へ伝来したことがわかる。また、他にも三十三観音の一尊として多羅尊観音を祀られたようだが、今の中国の寺院にはあまり見られない。しかしながら、現在中国仏教圏における唯一の仏教系の度母道場と言われている陝西省西安市蓮湖区西北一路152号に位置する広仁寺（西安）においてはチベット仏教風の多羅菩薩が祀られている。そのため、広仁寺の多羅菩薩の由来について、曾立平氏は次のように述べられている。

> 當年松贊干布派噶爾東贊到長安求親。噶爾東贊帶來一尊用六公斤黃金造的綠度母像，作為貢品。唐太宗答應了這個親事，將文成公主嫁給了藏王。文成公主入藏前，請求唐太宗將供在開元寺的國寶釋迦牟尼佛十二歲等身像帶到藏地。這尊佛像被帶走後，蓮花座依然留在開元寺。有一次唐太宗到開元寺，看到空著的蓮花座，心想：在蓮花座上供什麼佛像好呢？這時，那尊度母說話了：“皇上，您不必供其他佛像，就由我來替釋迦牟尼佛度化眾生吧。”於是，唐太宗就將綠度母供在了釋尊的蓮花座上。1703年，康熙西巡西安，修建了廣仁寺，將這尊綠度母像及巨光天母像和一鬚天母像改供廣仁寺。於是，廣仁寺就成了漢地唯一的綠度母道場。在漢地寺廟的大雄寶殿里，一般供奉的是釋迦牟尼像，而廣仁寺的大雄寶殿裏却供着綠度母[39]。

この記述からこの多羅菩薩は唐時代に吐蕃から唐の皇帝に貢ぎ物としてもたられ、元々釈尊の代わり

39）曾立平「綠度母・藏傳佛教觀世音」東方收藏、第２期、2014年

に開元寺で祀られたが、後の清時代に康熙帝によって、広仁寺に建立し、多羅菩薩像も開元寺から広仁寺に持たされ、そこで祀られるようになったという。この記述から広仁寺の多羅菩薩の由来が分かるが、現在の広仁寺に祀られている多羅菩薩は現代のものと近いため、多少修復されたものであると考えられる。

３．日本における多羅信仰について

一方日本においても単独に祀られているのが見かけないが、多羅観音菩薩として三十三観音の一尊に属している。これに関して、田中公明は『チベットの仏たち』で次のように述べる。

> いっぽう我が国にも、この尊格は、多羅菩薩として紹介され、胎蔵界曼荼羅の蓮花部院（観音院）に列します。また変化観音の一種とも考えられ、三十三観音中に多羅尊観音がありますが、独立して信仰されることはまれでした[40]。

さらに、田中公明は彼のもう一冊の著書である『仏教図像学・インドに仏教美術の起源を探る』の中にも次のように述べられている。

> このように日本では、ターラー菩薩が多羅菩薩の名で知られ、『図像抄』にもインドの流布図像と同じ一面二臂像が紹介されているが、独尊としての信仰・造立されることはほとんどなかった[41]。

以上のことから日本にもこの多羅菩薩像を伝来したことが明らかであるが、それはいつ、どのように、またその信仰状態は今でも明らかになってない。また、現在の日本寺院においては三十三観音の中の多羅観音尊として祀られているのは見かけるが、その数は非常に少ない。だが、ここで筆者は二つに寺院を例として挙げたい。一つは青森県に位置する金剛山最勝院の三十三観音像ともう一つは長野県に位置する深妙寺の三十三観音像があるが、多羅菩薩の順番には多少ずれがある。次の表１はこの二箇所の三十三観音の名称と順番である。

表１　三十三観音名称及び順番

順番	金剛山最勝院	深妙寺
1	龍頭（りゅうず）観音	楊柳（ようりゅう）観音
2	持經（じきょう）観音	龍頭（りゅうず）観音
3	圓光（えんこう）観音	持經（じきょう）観音
4	遊戯（ゆげ）観音	円光（えんこう）観音
5	白衣（びゃくえ）観音	遊戯（ゆげ）観音
6	蓮臥（れんが）観音	白衣（びゃくえ）観音
7	瀧見（たきみ）観音	蓮臥（れんが）観音
8	施楽（せやく）観音	竜見（たきみ）観音

40）前掲田中公明『チベットの仏たち』、159頁

41）田中公明『仏教図像学・インドに仏教美術の起源を探る』春秋社、2015年８月、134頁

9	魚籃（ぎょらん）観音	施楽（せやく）観音
10	徳王（とくおう）観音	魚籃（ぎょらん）観音
11	水月（すいげつ）観音	徳王（とくおう）観音
12	一葉（いちよう）観音	水月（すいげつ）観音
13	青頸（しょうけい）観音	一葉（いちよう）観音
14	威徳（いとく）観音	青頚（しょうけい）観音
15	延命（えんめい）観音	威徳（いとく）観音
16	衆寶（しゅうほう）観音	延命（えんめい）観音
17	岩戸（いわと）観音	衆宝（しゅうほう）観音
18	能靜（のうじょう）観音	岩戸（いわと）観音
19	阿耨（あのく）観音	能静（のうじょう）観音
20	阿麼提（あまだい）観音	阿耨（あのく）観音
21	葉衣（ようえ）観音	阿摩提（あまだい）観音
22	瑠璃（るり）観音	葉衣（ようえ）観音
23	多羅（たらそん）観音	瑠璃（るり）観音
24	蛤蜊（こうり、はまぐり）観音	多羅尊（たらそん）観音
25	六時（ろくじ）観音	蛤蜊（こうり、はまぐり）観音
26	普悲（ふひ）観音	六時（ろくじ）観音
27	馬郎婦（めろうふ）観音	普悲（ふひ）観音
28	合掌（がっしょう）観音	馬郎婦（めろうふ）観音
29	一如（いちにょ）観音	合掌（がっしょう）観音
30	不二（ふに）観音	一如（いちにょ）観音
31	持蓮（じれん）観音	不二（ふに）観音
32	灑水（しゃすい）観音	持蓮（じれん）観音
33	楊柳（ようりゅう）観音	灑水（しゃすい）観音

以上の表１から分かるのは金剛山最勝院１番目龍頭（りゅうず）観音であり、33番目は楊柳（ようりゅう）観音である。一方、深妙寺の場合１番目楊柳（ようりゅう）観音であり、33番目は灑水（しゃすい）観音である。そのため、多羅尊観音の順番も一個のずれがあり、金剛山最勝院の23番目は多羅尊観音と深妙寺の24番目は多羅尊観音である。それ以外のメンバーは一致していることが分かる。

さらに、筆者は京都で現地調査を行い、京都府京都市伏見区石屋町521番地に位置する浄土宗に属する勝念寺にチベット仏教風の多羅菩薩が祀られていることを発見した。その多羅菩薩の写真の右側に「織田信長公賜 天竺仏　金剛多羅観音菩薩坐像」という赤文字で記され、下の説明文に次のように記されている。

当寺の多羅観音像は、金銅天竺仏坐像。御丈六寸三分、永く如意輪観音と伝わっていましたが、その像容、手の印相から、チベット仏教で信仰されている「緑ターラー菩薩」（多羅観音菩薩）と判明しました。古くは単に、金銅観世音　天竺仏座像と書かれています。

開山貞安上人が織田信長公より賜ったと伝えています。この仏様が何処で造られ、何処で祀られ、どの様な経緯で織田信長公の手に届き、開山貞安上人に授けられたのか、興味が尽きません。お顔が如何にも異国風であり、信長公当時の戦国時代、ルソンの壺のように外国との交易が盛んな頃に、

図５　勝念寺・多羅菩薩

千利休のような堺の商人などにより異国から伝えられた仏様と思われます。

このことから勝念寺の多羅菩薩は織田信長公より賜ったことが分かったが、それはいつどのように日本まで伝来したのかまだ明らかになってない。また浄土宗に属している勝念寺になぜ密教の菩薩である多羅菩薩が祀られているのも非常に興味深い。

おわりに

上述のように、東アジア仏教における多羅信仰について論じてきたが、東アジアにおける多羅信仰の展開を比較しただけでも、かなり異なった特色が見られる。概括すると以下の通りである。

まず、チベット仏教における多羅信仰は現在でも盛んに信仰されているため、本論文はチベット仏教における多羅信仰を中心として述べた。多羅信仰は吐蕃時代に伝来したが、その信仰は現在に至るまで順調ではなかった、吐蕃王国の滅亡に伴って、多羅信仰も一度衰えた。また、11世紀になると、インドの僧侶アティーシャによって、再び盛んになった。そのため、後期チベット密教においては非常に重要な女神であり、その造像もチベットやネパール等のチベット仏教圏では盛んに行われた。

一方、中国と日本にもこの尊格が伝わってきたが、チベットほど崇拝されていない。現在の日中両国の寺院においては、あまり祀られていない傾向があるが、三十三観音の一尊として多羅尊観音またはチベット風の多羅菩薩を祀っているのは管見の限り中国・西安の広仁寺と日本・京都の勝念寺だけである。しかしその経緯についてはまた明確になってないため、今後の課題としてこれから研究を進めていきたい。